

リトルリーグ東関東連盟MLBカップ連盟大会規則

令和4年3月改正

I 大会規則

2022年公認競技規則、トーナメント規則及びガイドライン、本大会特別規則並びに公認野球規則を準用する。

II 登録

- 1 選手登録は、学年を採用して4年・5年に限定する。
混成チームは「●●連合リーグ」と称する
選手は9名以上20名までの連番とする。指導者は監督1名、コーチ2名以内の成人とする。
選手登録は事前に各ブロック長の承認を得て、開幕式当日に提出する。

III 服装

- 1 選手は統一した服装を着用し、ユニフォームの胸にリーグ名の表示のあるものに限る。
なお、白色のアンダーシャツは認めない。
連合チームは自リーグのユニフォームで良い。但し、背番号は「1」からの連番とする
- 2 監督コーチの上着は、白の襟付きシャツ、スラックス（ズボン）は下記の通りとする。
 - (1) 白、黒、魂、茶、グレー、ベージュ各色系を可とする。
 - (2) 華美な色は不可
 - (3) 全体が単一色であること。（別色のライン等のあるものは不可）
 - (4) チノパンは可
 - (5) ジーンズは不可
 - (6) ショートパンツは可とする。色はショートパンツ、靴下とも上記「(1)項」に準ずること。
 - (7) 監督、コーチは同一の服装であること。
 - (8) リトルリーグの指導者として相応しい服装であること。
 - (9) 靴、ベルトは別色でも可とする。
 - (10) 監督、コーチの帽子は選手と同じものか、白色で統一したものを着用する。

IV 用具

- 1 捕手は試合及び練習時も公認のヘルメット（耳カバー付）、プロテクター（ロング、又はショートタイプ）、マスク（スロートガード付き）、ファールカップを着用しなければならない。
- 2 非木製バットは、USABat規格に合致したものでなければならない。（規則1.10参照）
瑕疵、変形等があるバットの使用は不可。用具チェック時に審判員が確認する。
- 3 バットリング、マスコットバット、鉄棒、メガホン等のベンチへの持ち込みは禁止。
- 4 手袋、リストバンドの使用を許可する。但し、派手なものは好ましくない。尚、投手は又、許可しない。
- 5 サングラスの使用は指導者、選手が必要な時は大会本部又は審判員が確認して許可する。
帽子のつばにサングラスを乗せることは禁止する。
色の制限は定めないが、ミラーグラス（反射するもの）と眼鏡枠が白色の物は不可。
- 6 ヘルメットの顎ひもをきちんと着用することが望ましい。又、フェースガード付きCフラップ付ヘルメットの使用を認める。
- 7 グラブのひもは、必要以上に長いものは認めない。
- 8 **投手のグラブについては、縁取り、しめひも、縫い糸を除くグラブ本体（捕球面、背面網）は白色、灰色以外の1色でなければならない。**

9 出場選手全員に胸部保護パットの着用を義務付ける。

V 試合の準備

- 1 ベンチは組み合わせ番号の若いリーグを1塁側とする。
- 2 先攻、後攻はメンバー表の提出後キャプテンにより、決定する。
- 3 シートノックは後攻リーグより行う。時間は7分間とするが場合によってカットすることもある。又、シートノックは1日1回を原則とするがグラウンド状態の変化により2回行うこともある
- 4 試合前のノックの際、登録選手が不足している場合3名までの補助を認める。
- 5 試合前ブルペンでの投球練習を監督、コーチが傍らで見ても良い。

VI 試合の運営

- 1 **試合は6回又は、1時間45分とする。1時間45分を過ぎて新しいイニングに入らない。**
トーナメント戦は6回を終了して同点の場合は延長は行わず。即タイブレーク制を採用する。
リーグ戦は引き分けとする。
タイブレークの方法は次の通りとする。
 - (1) 攻撃はノーアウト2塁から始める。
 - (2) 打者は7回終了時の継続打順としその回に一番最後に打順が回ってくる選手が2塁走者となる。
 - (3) 投手は7回に登板していた投手が投手規定に従って引き続き投げる。
- 2 全試合、3回15点差又は、4回以降10点差によるコールドゲームを採用する。
- 3 ベースコーチは次の条件を満たしていなければならない。
 - (1) 自リーグのユニフォームを着用した有資格の選手、監督、コーチ
 - (2) 2人の大人のベースコーチが許される。但し、ベンチに監督又はコーチが1名いる場合。
 - (3) 大人のベースコーチもヘルメット着用が望ましい。その場合、出来る限りリーグと同じものとする。
 - (4) ベースコーチは自リーグの打者、走者のみに指示することが出来る。
 - (5) 同一イニング中はボックスの移動は出来ない。
 - (6) コーチスボックスから出て自リーグの打者やるいじょうの走者に指示した場合は攻撃側のタイム数の数える。
 - (7) 相手に対してスポーツマンシップに反する言動があった場合、1回目はベンチに戻す。当該者はその試合中コーチスボックスに入れない。2回目は監督の退場となる。
- 4 ベンチ内の監督及びコーチはみだりにベンチを離れることは出来ない。
- 5 攻撃側のタイムは1イニング1回である。尚、守備側のタイム中に指示する場合は1回に数えないが守備側のタイムより長い場合は1回に数える。
- 6 監督、コーチが1イニングに1度投手のもとへ行くことが出来るが、2度目には投手交代となる。又、1試合に同一投手のもとに2度行くことが出来るが3度目は投手交代となる。投手に指示をする場合はマウンドで行う事。この時、捕手及び内野手が集まっても良いがスピーディーに行う事。
- 7 試合中に野手がマウンドに集まることは規制しないが試合の流れや頻度に応じて審判員が認めない場合もある。
- 8 投手のウォームアップ時に打者が打者席に近づきタイミングを計る行為を禁止する
- 9 走者やベースコーチが捕手のサインを見て打者にコースや球種を伝える行為を禁止する
もしこのような疑いがあるときは審判員はタイムをかけ当該選手と攻撃側のベンチに注意を与え止めさせる。

- 10 ネット裏や観客席から相手リーグの情報を伝える行為を禁止する。
- 11 ベースコーチが走者の触壘に合わせて「セーフ」のジェスチャー、コールの行為を禁止する。
- 12 臨時代走
- (1) 打者及び走者が事故等で走者になれない場合、臨時代走を認める。尚、走者は投手と捕手を除く打順の一番遠い選手とする。
 - (2) 頭部に投球又は、送球を受けた場合は必ず臨時代走を出すこと。
 - (3) 攻撃が終わっても前記の選手が速やかに出場できない場合は選手交代となる。
- 13 走者がヘッドスライディングした場合はアウトになる。
- 14 反則投球がなされた場合、走者を進塁させずボールを宣言して投球数に加算する。又、投球しなかった場合もボールを宣言して投球数に加算する。

VII 監督・コーチ・選手の退場

- 1 次の場合、大会本部及び審判員は監督、コーチ、選手を退場させる
- (1) 自軍のベンチ及び応援席から相手チーム及び審判員に対して暴力行為や暴言をはいた場合、監督及び当該者を退場させる。
 - (2) 審判員の判定及び指示に従わない場合、監督及び当該者を退場させる。
 - (3) 前記VIの(8)、(9)で同様の行為を再度審判員が見つけた場合
 - ① 攻撃側の監督と当該者は退場となる。
 - ② 打者は安打、失策等で塁に出た場合は打撃を取り消し、打ち直しとなる。
 - ③ 打者が打撃を行いアウトになった場合はアウトを有効とする。
この時走者が進塁した場合(犠打)は全ての走者を打撃前の投球当時の占有塁へ戻す。

VIII 降雨、日没、時間制限等で試合続行不能となった時

- 1 1回が終了していないで続行不能となった場合は、ノーゲームとする。その場合すべての記録は無効となる。又、2回目以降続行不能となった場合はサスペンデッドゲームとし全ての記録は有効となる。
- 2 試合成立後に続行不能となった場合は勝ちが決められる場合は試合終了とする。決められない場合はサスペンデッドゲームとする。
- 3 試合成立後にインングの途中で続行不能となり、勝ちが決められる場合でも、先攻チームがその表の攻撃で同点にするかリードしており、後攻チームの攻撃が完了していない場合や後攻チームがリードを奪うことが出来ないうちに中止となった場合は、当該試合は再開しなければならない。
- 4 サスペンデッドゲームとなり、その翌日に試合が再開された場合、中断時点で投手であり中断までに20球以下の投球数の投手は続きの試合に於いてその投手の投球数はゼロからカウントする。中断までの投球数が21~40球の場合は続きの試合に於いてその投手の投球数は中断された時点の投球数からカウントする。41球以上投げた投手は1試合空けるか規定の休息日が必要となる。

IX 特記事項

1 「全員出場義務の規則」、「スペシャルピンチランナー」は適用しない。

2 投手の規則

- (1) 降板した投手はその試合では投手に戻れない。
- (2) 1日及び1試合に投球できる投球数は下記の通りとする

学年区分	最大投球数
5年生A (4月2日～8月31日)	85球
5年生B (9月1日～4月1日)	75球
4年生	75球

- (3) 投手が打者と対戦中に投球制限に達した場合は、その打者が完了するか、又は、打席中に攻守交代となるまで続投できる。
- (4) 投手が1試合に20球以下の投球であれば次の試合に投手として出場出来る。但し同日の次の試合の投球数は最大投球数から前の試合の最終打者を完了した時点の累積投球数を減じたものとする。
- (5) 投手が21球以上投球した場合は1試合空ければ登板は可能である。
- (6) 投球数と休息日は以下の通り

1日の投球数	休息日
66球以上	4日
51～65球	3日
36～50球	2日
21～35球	1日
20球以下	不要

休息日はいずれも最終打者と対峙した時点での1球目の投球数が基準となる。

- (7) 投手が41球以上の投球をした場合、その日は捕手を務めてはならない。
注：投手が打者に対しての間に投球数が40球に達した場合、投手は以下のいずれかに至るまで続投することが出来、その日その後捕手としてプレー出来る資格を有する。
 - a. その打者が出塁する
 - b. その打者がアウトになる
 - c. 第3アウトが成立し、そのイニングが終了する
 - d. その打者が打席を完了する前にその投手が降板する投手は次の打者に投球する前に降板するか試合が終了すれば、その投手はその後捕手としてプレーすることが出来る。
- (8) 試合で4イニング以上捕手を務めた選手は、その日は投手を務めてはならない。
注：4イニングはアウト数（12）ではなく守備に着いたイニング数である。
又、4イニングは1試合の数であり、2試合行った場合は合計イニング数ではなくそれぞれの試合でのイニング数とする。
- (9) 捕手を3イニング（以下も含む）務めた選手が投手に交代し、同日21球以上投げた場合、その日は再度捕手を務めてはならない。
例外：投手が打者と対戦している時に投球制限数の20球に達した場合は以下の条件で投手を続け、その後捕手への交代が可能である。
 - a. その打者が出塁する
 - b. その打者がアウトになる
 - c. 第3アウトが成立し、そのイニングが終了する
 - d. その打者が打席を完了する前にその投手が降板する

3 申告敬遠

次の場合、打者は走者となりアウトになることなく安全に1塁に進める権利が与えられる。（但し、打者が1塁に進んでそれに触れることが条件となる）

- 1) 審判員が四球を宣言した場合
- 2) 守備側チームから球審に対し打者に“申告敬遠”を選択することの通知は打者がバッターボックスに入る前でもバッターボックスに入っている時でも構わない。カウントの途中からでも申し出ることが出来る。
注1： その通知は守備側チームの監督からなされなければならない。監督は“タイム”かけ、タイムが認められた後に打者に四球を与える旨を球審に伝える

なければならない。

注2： ボールデッドとなり、塁上の走者は打者走者の四球により押し出される場合を除き進塁できない。監督が申告敬遠を通知した時の打者が申告敬遠を完了するのに必要なカウントに基づき投球数が与えられる。

X スピードアップ

- 1 投手はボールを受けたら速やかに投手板に付いて捕手のサインを受ける。
- 2 捕手は受けたボールを速やかに投手に返球して投手にサインを送る。
- 3 捕手はホームプレーより前に出ないで野手に声をかける。
- 4 内野手はボール回しを定位置で行う。
- 5 内野手は外野手からのボールを定位置から投手に送球する。
- 6 打者は打者席を外さずにベンチのサインを見る。
- 7 ベンチからのサインは短くする。
- 8 守備に着くとき、ベンチに戻るときは必ず走る事。

XI 新型コロナ感染防止対策

- 1 日本協会、東関東連盟、各自治体通達のガイドラインを遵守し感染防止対策を徹底する事。
- 2 ベンチ内の選手、監督、コーチはマスクを着用する。又、大声を出さない事。又、コーチスボックスに入る選手、指導者もマスク着用も事。
- 4 試合前後の挨拶はベンチ前で行う事。
- 5 応援の保護者はマスク着用の上、密にならないよう間隔を取って応援する事。
- 6 その他は連盟の大会綱領を参考

